

断罪された自意識と人間文明 ～地獄絵図的無調性実験音楽（序盤のわけのわからない声で面食らうかもしれませんがあくまで“実験音楽”であって面白いと思うので、17分と長いですが出来れば全部聴いて頂ければ幸いです。実験音楽なのですが“偶然性の音楽”的手法をとることによってそれぞれ地獄絵図のあの世界観のインスピレーションがよぎって、表現する事となりました。

イメージとしては序盤は静寂の中の制裁に拷問ではじまり、徐々に激しさが増していった最後は人体切断、槍で風穴を幾度も空けられ烈火の炎で焼かれ・・・と阿鼻叫喚そのものの惨劇が繰り返されています。まさにあの絵図の世界観です

これは後述しますが私が「もし現段階で地球人類すべてが地獄に相当する振る舞いをしているとしたら」と考えていた頃で、それがシステムティックな現代における食肉文化への漠然とした疑念につながっています)

この曲は私の音楽的屁理屈を具現化するための実験音楽のつもりでやりました。

音楽が発展を遂げていく中で「これからの音楽はどうなっていくんだろう？」という疑問がふとした時に浮かんで来て、というのも数百年も前、遡れば西洋にてユニゾン以外は殺してしまえの時代からドミソという1度、3度、5度の基本のトライアドから7度などのテンションといった新しい和声へ発展し、どんどん自由度が増していき、その西洋の音楽理論は歴史の変遷と共に世界各国に散らばり、例えばそれはアメリカへ渡り、奴隷として連れて来られた黒人達が、自らの地理的バックボーンにあるアフリカ音楽のリズムと西洋の音楽理論を融和させ、ブルース・スケールなどの新しい音階が誕生し、宗教を与えられた喜びを歌ったゴスペルにはじまり、ブルースからジャズへ、ジャズからロックへ・・・と、かなり大雑把に振り返るとこういった流れになります。

その流れの中で近代では、ジャズとブラジル音楽が会ってボサノバやラテン・フュージョンなどといった音楽や、プログレッシブロックなど、ロックやクラシック、ジャズはもちろんのこと、古今東西の民族特有の音階を使用する、ありとあらゆるワールドミュージックをも包括したジャンルも誕生しました。

そしてデスメタルやグライندコアなどのいわゆるエクストリームミュージック、インダストリアル、ノイズミュージック、最近では極限の速さを極めるブレイクコアといったとてつもない音楽も、水面下ではあるようですが賑わっているようです。

それでふとした時に、先述の「これからの音楽は？」という疑問の原因は、現代の多種多様な音楽に触れている身として、もはや出尽くしてしまったのでは？ というごくごく単純な考えに起因していたのです。

もちろん新しいメディア、最近ではボーカロイドなど、YouTube やニコニコ動画などの媒体を介した、ネットコミュニティーと密接な関わりを持った新時代の音楽の形も提示されているようで、アニメソングのリミックスや、広義で言えばMADと呼ばれるVJ的要素のある作品、ひいてはオリジナルのアニメ・映像作品と、何も「音楽」と堅苦しくカテゴラ

イズせずとも音楽というメディアは日々発展をしているようですが・・・。

「音楽性」という曖昧な言葉を使いますが、それについてはもう先人のやってきた事を踏襲して反復するだけなのではないだろうか、と思う事があるのです。もちろんそのマンネリズムを克服するために「理論」や「手法」に新しい方法論を導入することは多方面でありました。

例えば、マイルスデイヴィスはそれまでのコードに縛られたアドリブから解放されようと、モードジャズといった自由度の高いアドリブの出来るジャズ理論を作り上げました。

(私はそこまで言えるほどマイルスやジャズに詳しくはありませんが) そのあと、エレキベース、エレピなどの電子楽器を導入し、環境音楽にも通ずる音世界を構築し、自身のモードジャズのスタイルを更に追求した・・・私的に大雑把にはそういう解釈でいるんですが。しかしそれでも現代の音楽観に立てば結局は理論に縛られています。

モードジャズだ、プログレだ、とは言っても結局は何がしかの音楽理論のもとで音は鳴っています。コードやモード、スケールという考え方が根っこにあるわけですから。

そこで、かどうなのか私は知りませんが、推測するにそういった理論に縛られた従来の音楽に飽きた連中(ピカソタイプですね)だとか楽器の弾けない連中(笑)だとかがインダストリアルだの、ノイズだのといった実験音楽を始めたのではないかと思います。

もちろんその前にも現代音楽などの分野で実験的な無調音楽は存在していたみたいですし、ジャズの即興性を極限まで極めたフリージャズなど、現代音楽に密接してくるにしたがって無調、あるいは即興的なものへの傾倒は顕著となってくるようで、無調への傾倒という側面自体が20世紀前半でやれる事はやっだし、あとはそれを否定することしか出来ないという厳然たる事実を表しているように思えてなりません(余談ですが、これは美術史にも通ずる事で、写実写真は写真機に任せたらいいという事で日本の浮世絵などの二次的な、平面的な描写に影響を受けた画家たちがはじめたとされる写実的な描写を避けた印象派を経て、シュールレアリズム、抽象絵画、現代ではよく分からないめっちゃくちゃな表現方法もあり、というように共通するのは従来の様式を否定し、発展している事です)。

インダストリアルやノイズミュージックなどの、その反骨的なスタンスはパンクロックなどにルーツがあるものかもしれません。

そのパンクロックの潮流にあるアートリンゼイ氏なんかはその楽器の弾けない、音楽理論もよく知らないけど音楽やりたい! やれちゃった! 的音楽を作っちゃう人で、チューニングを全く施さない12弦ギターを使って演奏していました。

日本で言えば山塚アイさんはただただd叫んで、わけのわからない自作の楽器を使って演奏したり、若い頃は猫をチェーンソーで切り刻んだり、ユンボでライブハウスに突っ込んだりしてたようです。どうかしてますね。でも、そこまで突き抜けて感情を解放させるのは、やはり気分がいいものなのでしょうね。

当然これらの音楽には音楽理論などというおカタイ考えは一切通用しません。(若い頃の山塚アイに至っては音楽というよりアングラ系のパフォーマンスアーツに近いですが)

自分の感性のみ。そして極めて原始的な手法により音楽を構築していきます。
非常階段というバンドなんかも同様に、シンセとエフェクターなんかで作った人工ノイズに、スクリーマーと称した女性の、文字通り「金切り声」をひたすら撒き散らし、横にいるおっさんはギターを適当に（多分）かき回してたまにぶん投げたり、踏んづけたり、また持ってかき回してまたぶん投げて、たまに叫んで・・・という有様で、スロッピング・グリッスルというアメリカのインダストリアルバンドは一応メロディーといった旋律のある曲が多いですが、シンセで作ったホラー映画のSEのような不穏なノイズ上で瓶でギターを擦って・・・。

このように従来音楽の規範から外れた音楽、楽器と呼べないものを楽器にするといったミュージックコンクレートの要素のある音楽や手法は既に試みられています。

叫び声、足音、呼吸、鼓動・・・森羅万象に宿る音すべてが音楽になりえます。決まった音程を伴わないという意味では打楽器的と言えるかもしれません。

もっと言えば例えばピアノの鍵盤はしっかり音が伴って、というのはドであり、レであり、音程のある音が発音されて始めて用途を足すと思いがちですが、極論を言えばグランドピアノそれ自体を叩くだけで打楽器となりえるのです。調律をわざと狂わせたり、ピアノの弦に直接触れて弾く、内部奏法という奏法や、かのジョンケージ氏の作品でも有名な、プリペアド・ピアノという、何か別のものをピアノの弦に挟んで弾くといった奏法もありますし、ピアノそのものを叩くだけで打楽器になりえます。

私個人的に言えば「音」というのはもっと普遍的な意味をもつ原始的なもので、「音楽」というのは組織化され、洗練された音の集まり、例えばそれはオーケストラであり、ジャズバンドであり、明確な作曲意思、演奏意思を伴ったそういうものを曲といたり音楽というものなのだと、どこからどこまでを音楽というのかいつでも疑問におもってしまいます、下手な演奏、聞くに耐えない演奏すらも音楽に昇華できるんじゃないかと、それも一つの音楽の一手法に位置づければいいわけですから。

「音」そのものは演奏しているという意思がなくとも我々が発しているものです。

そう、私のこの下らない持論に反論しようとするあなたも声という音を発さなければならぬ。「なにを言ってるんだ、たわけ！」この文章を言葉として、音として発する時も、厳密には音程を伴うし、その音は時間の中にさまようわけですから、テンポやリズムというものも生まれます。

さらにひとつに聞こえる音の中にも倍音が含まれ、何層にも重なった音が揺れてひとつの音として処理されて人間の聴覚に届きます。

その倍音を伴った一つの音が重なればもっと奥行のある音が出来上がります。

例えばそれはデタラメにピアノの鍵盤を押さえた時に鳴る不協和音、この不協和音の実音の背後には倍音を伴ったなんとも不穏な響きが見え隠れしています（私はこの音がとても好きで M7 や 9 などのシャンパンやドレスシャツ、間接照明を思わせるおしゃれなコードもいいですが、こういった狂気に満ちた音の響きは潜在意識下にあるものを引き出してく

れるようです)

では、ジョンケージ氏は一体どんな意味で「4分33秒」を作曲したのでしょうか？

この曲は3楽章に分かれています、事実上4分33秒の間なにもしません。

ただ、3楽章に分かれていますので白紙の楽譜をめくります。

変わった光景ですが、その無音の間もコンサート会場内では何らかの音が鳴っています。

まったくの無音ではありません。楽譜をめくる音も当然鳴ります。

観客が咳き込むかもしれない、服の擦れる音、椅子と身体の擦れる音、外から偶然聞こえてくる音、コンサート会場での無音という常軌を逸した状況に笑い出してしまう客の笑い声、はたまたコンサート会場での無音という常軌を逸した状況に狂い出してしまう客の奇声・・・そのどれもが無いとは言い切れない、それらのどの音も音楽になりえるとしてケージはそれを「偶然性の音楽」と呼んだのでしょうか。

それらの自然音は明確な演奏意思、4分33秒の楽譜があり、オーケストラなど、そういった編成でもって「演奏」しているという意思表示をしています。

そしてその偶然鳴った音という物理現象が4分33秒という作品それ自体なわけです。

つまり演奏、音楽というのは意思と事実の客観的、主観的な観念が合致した時に既に成立しえるものなのです。街中の雑踏一つ取っても、成人ならば大体BPM120くらいの4拍子を刻んでいたりします（ちなみにジョン・トラボルタはびったり120で歩く事が出来る特技があるとか）その上でいろいろな足音や、外野の音、時にはスピーカーから流れる音楽そのものが混ざって、複雑怪奇な音を生んでいます。それら自然音、環境音を使って構成した音楽がミュージック・コンクレートと言う手法ですよ。

「無音」というのも一つの音ですが、何か必ず音は鳴っています。無響室じゃない限り。（ケージはこの無響室での経験をもとに4分33秒を作曲したとも言われているようです）

つまりこの空間、我々の暮らすこの空間内で発せられた音、それが意図したものであろうがなかろうが、音という物理現象はすべて音楽になりえるのです。

音楽というのは普遍的な物理現象を利用した芸術の一つであると考えます。ドレミファソラシドはあとから作られたものであって、「音」というのはもっと根源的かつ原始的な意味を持つものなのです。「音」という概念が存在しなければ言語というものは発展しえなかったでしょう。

その意味で最も身近にあるものと言えます。そういう観点から考察すると、常に「意図しないアンサンブル」が奏でられていることになります。

国会で熱弁を振るう政治家、国会で寝息を立ててしまう政治家、ホワイトカラーとして頭脳労働に興じる人のペンを紙に走らせる音、そのオフィス内の人々の声、ブルーカラーとして肉体労働に興じる人の木材と木材がぶつかる工事現場の音、はたまた私のように音楽を奏でる人、今こうしてパソコンのキーボードを打ち込むカタカタ音・・・それが音程を伴っていようとまいと、打楽器的でもあるし、意図しない音程を伴っている場合もある。私の将来の究極の夢は、世界中の音という音をリアルタイムに24時間集めることです。

それはきっと素晴らしいアンサンブルが奏でられている事でしょう。世界中の人間のあらゆる活動を音楽にする、究極の現代音楽です。究極のコスモポリタニズムです。

そしてそんな人々の生命活動を切り貼りするか、あるいはそのまま音源にして作曲者が「これは〇〇というタイトルの楽曲だ」とでも言えば、明確な作曲意思を持ったものとしてたちどころにひとつの楽曲になるでしょう。

もちろんそのまま自然音を、というか環境音を切り取るのはそれはどちらかといえば映像作品にしてしまった方が都合がいいので、それをそのまま楽曲にするくらいならばあらゆるエフェクトをかけたりなんかしたり、アレンジを加えたほうがよっぽど聴覚的には楽しめると思うので誰もそのまま聴かせるなんて出し惜しみのようなまねはしないと思いますが、極論を言えば要するに音楽は人間の聴覚が気持ちいいと感じれば何でもいいわけですね。

もちろんリズムやテンポ、キーといった秩序がありますし、その秩序がもたらしたある一定のルールに従ってこそ美しい旋律は展開されるんだ、そのルールあって演奏家は鍛錬に鍛錬を積むんだとおっしゃる方もいると思いますが、音楽がこれだけ多様化してしまった現代においてそのような物言いは一理はあっても汎用性の高い言説ではない気がします。それでもクラシック音楽の世界において、各人それぞれが鍛錬に鍛錬を積み重ねて一糸乱れぬ演奏を繰り広げるオーケストラの人々の演奏や、作曲者の意志を尊重し、その楽曲を試行錯誤しながらも体現しようとするピアニストの人々などの音楽に対する真摯な姿勢を目の当たりにすればそんないい加減な事はいえなくなると思いますが・・・。

そうとはいっても当然リズムという秩序が聴覚的に、体感的に「ずれた、遅れた、もたれた」と感じたならばその音楽は拙い演奏と認識されると思いますが、はじめからリズムやキーなどという秩序をもたさなければそのような事態になることはないでしょう。

もちろん音楽に限らず人はある決められたフォーマットに沿って物事を進めていったり、発展させていったりという作業が前提のもと物事を進めると思うのではじめは不自然に感じるとと思いますが、個人的に推察してみれば現代においてはポリリズムや変拍子だって「なんとなくリズムがおかしい事になってるけど、なんとなく気持ちいい」と多数の人が感じるはずですが、西洋のキチキチとした音楽理論にどっぷり浸かっていた人々からすればはじめにそれらを聞いた時は奇異に思ったのではないのでしょうか（憶測なのですが、ポリリズムなんかはやはり西洋の音楽理論の直接的な影響を受けなかった民族音楽から発展したものなのではないでしょうか、多分違うと思いますが、インド音楽のタブラ演奏なんかは1 2 3 4、1 2、1 2 3 4、1、1、2・・・とか、複雑すぎるリズムで割られてたりするので、それが伝統的な音楽様式と考えると、やはりリズムについてはポリリズムなどといった概念は西洋音楽が民族音楽と接近しはじめた辺りから発展したんじゃないかなと思っていますが、どうなのでしょうね）

そういう観点に立つと、これからの音楽って、そういったいわゆる平均律に基づかない、西洋の音楽理論を持たない、いわば「自然音楽」もやっちゃってる人いるし、どうなるん

だろう？という疑問は必然的に生まれます。

しかしやってみなければ分からないもの、そこで理論を度外視にした、どんな音も音楽になりえるという理屈を実践するための実験音楽が今回のこの曲です。

スタンレー・キューブリックの「2001年宇宙の旅」では猿人が知恵を持つと、動物の骨を使って武器にするという事を覚えた、というシーンから始まりますが、おそらく人類の音楽との接近はそういった骨なり木なり、そういった物質を使って叩くところから始まったのでしょ。そして、声という雄叫びをあげた。それに合わせて物を叩いた。手を叩いた。そんなプリミティブな感性、この空間と私と物がここに「ある」という存在から発せられる音という物理現象及び聴覚効果を使った古代より以前に遡る原始的な感覚のもと、仏具のロウソク立てを叩いたり、マイクを備え付けるためのマイクスタンドをひねったり、鍋に水を入れ、跳ね返る音をアクセント的に使い、手元にあったハーマンミュート（トランペットをやっていた事もありました）に小銭を入れ、ウイスキーの空瓶を差し込んで振って、無調的な音程をなぞるアルトとバスの音域の奇声をひたすら発する、といった手法を取り、考えられる限りで音楽に「遠い手法」で音楽になりえる方法を選びました。そこにはそうした原始的な手法をとることで近代のシステム化され、合理的に物事を進められる現代のあらゆる文明や文化を否定するという意味合いも含まれています。

ただ、リバーブくらいはかけないとどうしようもなく安っぽくなっちゃうので、そこは現代文明の恩恵を素直に受け取ることにして多少のエフェクトをかけて、SEにはシンセを使いました。

理論から外れるとルールや秩序、規範というものは失われます。

その分、自由度があがり、無秩序な状態になり、どんなことでも許されるのです。

人間の世界でも同じ。過激な考えですが、究極を言えば人は殺せるし、殺される。死ぬし、死なせられる。自分で自分を殺す事も、自分で他人を殺す事も出来る。不可能ではない。これは、当たり前な事です。もちろんやってはいけませんが、そのままに「そんなことはやってはいけませんよ」といって通用するのは幼稚園までです。

自分で考えられる歳になってからはなぜ、殺してはダメなのか？ そんなことを一度は考えた事があるはず。考えた事がないというのは、よっぽど人格者です。

その答えは人間特有の理性という人間性、法律という理論、秩序があるからです。それらを度外視すればできてしまいます。ひと度タガが外れ、無秩序になってしまうとどんな残酷な事でもやってのけてしまうのはジョージ・A・ロメロのゾンビ映画内での民間人だろうが、北斗の拳のモヒカン野郎だろうが、それらを通して描かれています。

この実験音楽はある意味で暴力的に捉えられてしまうかもしれません。

大方のJPOPや、4ビートのスタンダードジャズだったならばそんなことはないでしょう。それが例えディストーションのかかった不穏なデスメタルだったとしても、しかるところ従来のフォーマットに則した音楽にそこまでの不安は感じないはずで。

月並みですが、これはそういったきわめて無秩序な、制約や規制、モラルといった概念の

通用しない音世界が、予定調和のない音の構成と展開がアナーキーかつ暴力的な社会と結びついてしまうがために感じてしまう側面もあるのではないのでしょうか。

事実、私がある種の理論のまったく通用しないような声をあげていた最中、ある種暴力的な、ひたすら己の肉体から発するその発声に肉体を酷使うことによるマゾヒスティックな感覚と、そういった自虐的なデストルドーに突き動かされたような、俗っぽい言い方をすると「もうどうにでもなっちゃえ！」っていうような退廃的かつ終末的な、破滅と極限に向かうことによって得られるカタルシスを感じていました。そして物を叩く、という原始的な加虐的暗喩行為は暴力性を連想させるに余りあるものです。叩く、叫ぶ、振る・・・穏やかではありません。

バタイユは「エロティシズムとは本質的には暴力と侵犯の領域である」と論じました。

根本のある種暴力的な性衝動が創造への原動力になっているのでしょうか。

こう書くとちょっと危険な人という印象を持たれるかもしれませんが、あまり露骨に表現する事を避けるならばバタイユも論じていたように我々の日常的な動きには時折恐ろしいほどの過激さを伴うことがあることはたしかです。

この曲中でのある側面での暴虐的な側面は、完全なる即興演奏かつ使う楽器すらも楽器という範疇にない楽器を用いるなど、その従来までの秩序、音楽的秩序を壊し、例えば仏具というそれ自体に宗教的意味のあるものを叩いて楽器にする、宗教的侵犯という神秘と禁忌の領域を合わせ持ち、そういった多分に変質的な意味を持つに相当する行為に及んでいく自分への背徳的な、すなわちあらゆる意味での健全な秩序を壊すものとしての暴虐的な負の意識をも表すもので、それらを無意識の内に体現したのかもしれませんが。

説明しづらいですけど、常に「異端」でいたいというか、風変わりなことをしていたいというのは確かなんですが、その割に主張しすぎないというか・・・。

更に水の音を入れたというのも、水が波打ちぶつかって発せられる音というのは、どこか性に関する連想をさせるに十分なものです。ここから先は私なりの持論もあるのですが、心理学の専門家ではないので割愛させていただきます。

しかしこの曲を通して、私の関心が単純に楽器から発せられる音程のある「音」ではなく、意図しない偶然性の日常生活内の物質全般から発せられる「音」そのものにも移っている事が分かって頂けたら幸いです。ただの屁理屈っちゃ屁理屈なんですけどね。

当然、このような実験音楽だけではなく、コードやキー、メロディーといった概念のあるものも作曲してますが、気力が必要で、何よりも編曲も込みでやろうとすると構成をしっかり練ってからでない録音もできないし疲れてしまうので、こういった即興的な手法を使う事により、何でもあり故に多少のミス（って何を指すのかわかりませんが）すらも音楽になってしまう特性を活かして、息抜きで作ったんですが、掘り下げるとそれは、私の中に存在する「プリミティブで衝動的な暴力性」に起因している事がわかってきました。

基本的に私は自分が嫌いなのです。もちろん最低限の自信や自尊心はあります。

しかし、常にどこかで嫌っていて、冷めた目で唾棄している自分自身を克服したいし、私

自身を何とか好きになりたい。

その嫌いな自分を克服するための手段が音楽などの芸術（「Obsession」の解説でも書いてますが、表現とは自分の中にある穴を埋める作業、真面目に取り組んできた人にしれみれば腹立たしいかもしれませんが、私は学業を捨てた分何かに打ち込み、巻き返さなければならなかった）であるとして、それがリビドー、生きたいという願望なのだとしたら、適応できなかった自分が嫌い、殺したい、死にたい（とまではいかなくとも）そういったネガティブなデストルドーが内攻的に自分に向かうエネルギーが、それを克服するための創作活動への原動力となっている、とすれば、ここで言う暴力性というのはその表裏一体の生と死への相反する欲求が生んだもの、それが衝動的な暴力性につながり、故にある面で加虐的な「音の発音行為」、すなわち叩く、振るといった行為につながったと言えるのではないかなと思うんですが、この曲は精神科医に聴かせるべきなのではないでしょうかね？（笑）

P.S.

多重録音を繰り返している内にあれやこれやとインスピレーションが湧いてきて、結局最終的に多少の編曲的作為性のある予定調和的なものとなってしまいました。

あとから聞き返すと、「もっとこうすりゃ良かったな」とか「何この声、きめえ ww」とか思って、そのテイクだけ録り直そうかとも考えましたが、基本的に偶然性の音楽を標榜した実験音楽なので、それをやってしまったら最初の趣旨から逸脱するしでそのままのテイクで軽くマスタリングしてミックスダウンで音源にするに至りました。

即興音楽として誰か人でも呼んで一発録りでやれば、もっと作為性のないものが出来上がったはずですが、そんなことに付き合ってくれる暇な人は私の周りにはいませんので、必然的に何テイクかに分ける手法を取らざるを得なくなります。

よくよく聞き返すと、和声らしきものもあるようなないようなで、本来の趣旨とは外れてしまいました、その分ちょっと前にやりたかった事がやれたようです。

というのも去年の年末に祖母が亡くなり、当然坊さんのお経を聞くわけですが、葬儀場で聞いたおじいさん、その息子、そのまた息子の 3 代の僧侶による世代を超えた儀式を執り行っていただいたわけですが、その光景を肅々と見ていた私は「これは日本、いや、仏経圏のオペラだミサだ」とかなんとか訳のわからん事を考えていまして、しかしこういった仏経圏の様式美を、何とか自らの音楽に取り込みたいと思っていました。単純に私の心を惹き付けるからです。

その前から武満徹の雅楽「秋庭歌一具」とか、琵琶や尺八といった東アジアの楽器に西洋の管弦楽としてのオーケストレーションをされた「ノヴェンバーステップス」など、いわゆるそういったエスニック、あるいは日本、ひいてはアジア圏の沖縄音楽、ガムランやケチャなどのトラディショナルな方面に意識が向いていたことは確かです。

専門的に勉強していないのであくまでインスピレーション程度としての影響で、アジア圏の文化や様式への関心は例えば着物に始まり阿部定事件に代表される、大正ロマン的な日本のオリエンタルな文化とヨーロッパの優雅さを併せ持った、そのどこか妖しくも美しい

世間の風俗、インドの神秘主義的な思想に影響を受けたヒッピーカルチャー、映画「エル・トポ」と、連想ゲームのようにイメージがあちこちに飛びますが、どれもアジア圏の色香を感じさせ、それ全体を仏教にはじまり、ヒンドゥー教という大まかなアジアの宗教的イメージへと連想させます。(エルトポは仏教映画というより無国籍な多宗教、多神教映画っぽくて、ヒンドゥー教に近いですが、アジアの伝統的な音楽との接近を意識したのは記憶が正しければアニメ映画「AKIRA」での芸能山城組の楽曲で、映画の内容と共に「イイなこれ」と思ったのを覚えています。芸能山城組はメンバーの方が医師やエンジニアといった様々な分野で、リーダーの大橋力氏は科学者として権威のある博士号を取って音そのものの研究を通したハイパー・ソニック・エフェクトというものを打ち出したり、芸術と学業のどちらも優れているダヴィンチのような人物がいるなんて私の立つ瀬がなくなってしまふ気がしてなりませんし、やはり文化というものは学問なしには発展しえないもので薄っぺらになるのかなと案じてしまいます。他人は他人、自分は自分、ですが素晴らしい科学者の素晴らしい音楽に素晴らしい漫画家の素晴らしい映画の競演が生んだジャパニメーションがAKIRAなのでしょう)

なにぶんアジアについてはまだ知識が乏しいので説明がしにくい事ですが、今はとにかくアジア、エスニック、ニューエイジ、サイケデリックというスピリチュアルな分野に強く惹かれている時期なのでしょう。お部屋のインテリアはガネーシャやヴィシュヌ神が描かれた布に見守られ、服装も徐々にエスニック寄りになってきたことにも表れています。

ジャズミュージシャンなんかは一様に民族音楽への関心を示していましたし、コルトレーンはその傾向は顕著だったようでインド音楽のみならずその哲学や精神性までも取り込もうとしてたみたいですね。遺作となったエクスペッションではインドの北ベンガル地方の民謡をベースにした旋律を奏でていたようで、インドをはじめとしたスピリチュアリズム的なものかなり惹かれていたようです(しかしこのアルバムは退屈・・・ではなく難解すぎるのか、まだコルトレーンの音を対等に受け取れる耳が出来てないのかもしれない。たしかに素晴らしくハードで力のあるアグレッシブな演奏ですが、はっきり言いますが眠くなってきちゃいます)

それで私もそういった「アジア」というテーマを用いて、いかにして音楽で表現しようかという考えは心の片隅にでも常にありました。

それでこの曲の取っ掛かりにとにかくアジアを取り込もうという事で倍音の豊かな仏具を選んだというのもそこに起因していたんですね。

目指すところは仏教、もっといえば密教などを勉強して、現代的なアレンジを施し、その上で経典それ自体を読経してもらうなど、音楽活動に更に昇華させたいのですが、この曲の最初の目的は徹底した法則性の破壊と最低限の規則、特定の楽器を用いた即興演奏による偶然性の音楽を趣旨としていましたが、結局はその偶然性の音楽による偶然性の発想によって、偶然性による法則性の音楽が出来上がりました。

(これは私ごとですが私が初めに影響を受けた芸術家としての、コント作家としての映像

作家、松本人志や、松本さんとはちょっと違いますがゴダールなどの映画の即興演出というか、即興性を重視した事によりあまりはっきりしないながらもぼやけた独特な世界観と間をそこに見出すような、そういった作品からの影響が根底にあるかもしれません。特に松本さんからはフリートークやコントなど、彼の作品やパフォーマンスの土台に流れる即興的な側面には大いに感化されました。そこから音楽、ジャズとかワールドミュージック、前衛・実験音楽など、即興的要素の取り入れられた音楽や映画ともリンクしていった、すべてのもの、すべの営みの根源的な起源は原始的な即興性にあり、それを大事にすれば作品は作れるという理論を自分の中で確立していったんです。そしてそういったインスピレーションを具現化する事も大事ですが、例えば恋愛映画を描くとしたらエロスという哲学、ひいてはアダムとイヴ、ロミオとジュリエットなど、古典的な文学・演劇を理解した上での引用、その構図を発展させたり、そういった要素がまったく無いに等しく、古典としての芸術的教養のない、ただの思いつきのような物語性故に某携帯恋愛小説は揶揄されたのでしょう。手塚治虫も自分の作品はドストエフスキーに基づいてると言っていたようですし、芸術を実践しようとするならインスピレーションや即興性だけでは薄っぺらいものになるという事を重々に理解した上で音楽だったらベートーベンやモーツァルトの曲の研究など、様々な古典的教養を身につける事も大事なんでしょうね)

今の段階は絵画や映画、音楽に宗教に根ざした文化と、断片的にあらゆる方面からの間接的影響で「こういうものがやりたい」とは思うのですがなにぶん知識が少ないのもどかしく思います。

それで先述したとおりはじめの取っ掛かりの段階では作為性のないものを目指していましたが、タイトルも「実験的即興音楽」と、特にこれといった主題のないものというか、曲そのものの出来不出来よりも過程の手段、いわば方法論を重要視して世界観や物語性などをもってのほかあるはずないと思って作曲活動に疲れて遊びで着手しましたが、出来上がった音源を聞いてみると、まず倍音の広がりのあるロウソクたての音が、先入観でアジア圏のものだということを暗示する事で、そこから発展して前にネットで見た「地獄絵図」の絵でした。

ゴヤの「我が子を喰らうサトゥルヌス」同様に猟奇的でどことなく土着的な怖さのある絵で、こういった凄惨さばかりが全面に出ているものはあまり見たいものではないのですが（あくまでコメディタッチなB級スプラッター映画は好きです）、この地獄絵図を見たときに、得もしれぬ恐怖を覚えました。

というのもその凄惨極まれりな絵自体もそうですが、死後に自分もこういった制裁を受けるかもしれない、その上それが気の遠くなる年月を経ても尚続くなんて、さらにそれはいつか必ず来たる、逃げられない、嫌だ！ とか一人で盛り上がり怖くなっちゃって（笑）所詮は昔の絵師の暴走か何かで描かれたものでしかないだろうに、それでも死後の世界の報告はないし、もしかしたら本当にあるかも、みたいな。

そのあとに追い打ちをかけるように食肉を糾弾するヴィーガン（ベジタリアン）の方のあるサイトで、食肉のために殺される動物、網の上で切り分けられた肉を焼かれる、などといった様子をこの絵と重ね合わせて「似ていませんか？ 因果応報は必ずありますよ」という記述を見たとき、今までの食肉という当たり前のようになってきた行い、ひいては食肉という近代においては誰もやっている人間文明自体を否定され、糾弾されたような気がして、同時に自らへのとてつもない罪悪感に駆られました（私の親もそうですし、会う人もほとんどが当たり前にしてきた行いが本来の抜本的意味を持つか、例えば大麻一つ取っても未だに体に悪いから違法なんだと考えていたりして、良しとされているものは良くて悪いとされているものは悪い、といった安直な二元論に陥りがちな人が多い気がします）

その前からも「しかし、いくら高度な文明を築き上げる事が出来た生き物だからとはいえどその生き物の都合で、これは愛玩用、これは食肉用とか言って無条件に区分するってえのも考えたらひでえ話だよなあ、牛や豚にしてみりゃ人間なんて悪魔なんて可愛いものじゃねえだろう、これはいつか進化を遂げた豚かなんかに報復されても無理ねえぞ」とか時々考えていました。（食肉を否定するわけではないですが、キッチンがあつたりと何もかもシステム化された現代では自分も外敵に狙われるという状況はあるはずもなく、食物連鎖というものは成り立たないので、アフリカや東南アジアなどの原住民の人々でもない上にキッチンのついた家に住む、いわゆる近代文明的な生活を享受するならば食肉というのは自然の法律的に考えれば基本的には必要ないなのではないかと思っていました）

となるとまったく必要のないものなので私がいずれは食肉を一切断つと決めた理由もそこにあります。しかし野菜だけでは都市部在住のイヤミなメトロセクシャルでもない限り難しそうなので、ペスコ・ベジタリアンという魚と野菜だけを摂る菜食主義を始めようと思いました。そして更に今まで命を頂いていたからという理由で最終的には鳥葬が私の理想の一つでもあるので鳥葬によって鳥と共に大地を羽ばたく、という情景をイメージして作った曲もあります）

それで、この曲を更に分析すると、やっぱり地獄絵図をまじまじと見たときの東洋的などこか土着的な恐怖が頭の中であって、それが近代文明における食肉文化への糾弾という情報とシグナルして「もはや理性は破壊され、あるのは暴虐のまかり通る秩序に基づいた人間文明と近代文明に生きながらにして傍若無人な食肉文化をやめない人間への断罪と報復のみ」という新たな地獄絵図の世界観、食肉文化と結びつけたそのパラレルワールドを音で構築した、という事になるでしょう。

そしてあえて原始的な方法をとることによってその人間文明と、その人間文明に生きる私自身の自意識すらも断罪するという意味合いも持ち合わせています。

それで、今考えてみるとそういった絵や芸術から着想を得て、残虐な文化なり、芸術を音楽で構築していて、実験音楽的となると、前述の山塚アイ氏が在籍していたバンド、ジョンゾーン率いるネイキッドシティの「グランギニョール」で既に試みられていました。タイトルは数世紀前にフランスにあった残虐なショーとか見世物小屋的な劇場の名前

のようで、CDの帯にはたしか「フランスに栄えたエロティックな残虐劇を表現した」とか何とか書かれてあって、音的にも演奏的にもそちらの方が格段まとまっており、かつ高度なアンサンブルを繰り広げています。

まあ私は一人でやっているというのがありますが、早く気の合う仲間を見つけて世に打ち出していきたいですね。受け入れられるかどうか知りませんが（笑）